

## 水俣エコツアー開催報告 7/30-31



公害・環境問題の原点の地・水俣。水俣病は水俣やその周辺の人たちの体だけでなく、こころや生活環境、コミュニティを傷つけ、多くの人が辛い思いを味わいました。今回その水俣の地を、長年に渡り「水俣病」の研究に携わってきた学園大学教授(当会代表)原田正純と共に訪ね、じっくり学ぶツアーを企画・開催致しました。

主な見学先として、ほたるの家、ほっとはうす(胎児生水俣病患者などの障害をもつ人の協同作業所)、出水の患者さん宅訪問、産廃処分場建設予定地見学、産廃処分場建設反対集会参加、水俣病資料館(語り部の話聴講)、百間水路、親水護岸、女島患者さん宅訪問など、二日間充実のプログラムとなりました。参加者は、十数名と少人数でしたが、それをプロ

ラムに生かし、直接患者さんのご自宅を訪問してお話を聞くという機会を設定することが可能となり、参加していただいた皆様には、大変貴重な体験となりました。

また、今回は、ちょうど大きく取り上げられている「産業廃棄物処分場建設問題」とも重なり、住民反対集会や、現地見学なども急遽盛り込んでのツアーとなりました。



出水の患者さん宅にて説明をうける



女島の患者さん宅にて



産廃処分場建設について住民の方から説明を受ける

水俣エコツアー参加者の皆様からの感想を一部抜粋、掲載させていただきます。

### 最も印象的だったこと

- ほたるの家、ほっとはうすでの胎児生水俣病患者さんとの交流
- 当事者の方の生の声
- 患者さん方と直接お会いし、話を聞いたこと。
- ほたるの家もほっとはうすも、いつも以上に多くの関係者が参加し、とても様々な声が聞けた。出水も両患者団体の意見、歴史を聞くことが出来、本当に盛りだくさんであった。

### 問題を改善するために必要なこと

- 地域再生を目的とした人間関係の再構築
- 水俣病に認定された方の家庭訪問記録の整理、課題分析
- 研究者も市民も一人一人出来ることからすること。
- グループホームを望む声が多いが、それぞれの満足する基準が違うので、多様なシステム、くつろぎの場を確保する必要があるようだ。

### 今回、学んだこと

- 地域の課題解決のために、様々な専門分野の人々の支援が必要であることが分かった。地域の大学の使命であると実感した。
- 疫学調査、健康調査の基本。水俣学について。分からないことは当事者に聞く。
- 家庭訪問の意義の再確認。現場で学ぶ姿勢。
- 実際支援する人はいても、その存在をきちんと患者さんに伝えていないと、その存在を信じられず、淋しい気持ちになるのだと気づいた。

### これから自分にできること/やろうと思うこと

- かんくまの活動を通して、少しでも地域再生のお手伝いが出来たらと考える。
- 水俣保健所での水俣病に関する活動(事業)について、再確認する。
- 保健師の役割を考える。水俣学について、知る、学ぶ機会に参加する。
- 地域再生のお手伝いのできたらと考える。
- 自分なりに、食と環境の関わりを考えること。